

ぼくのもう一つの家

小・5 内藤 颯大

ぼくには今住んでいる家の他に、東栄町というところにもう一つ家があります。その家は、内藤家のご先祖様が住んできた家です。ぼくの祖父もそこで生まれて、小学生まではそこに住んでいたそうです。今はだれも住んでいないのですが、祖父の姉と祖父がときどき行って、草かりをしてくれたり、家を開けて、空気の入れかえをしてくれたりしています。

ぼくは、内藤家の十五代目だそうです。この家は木で作られていて、柱もとても太い、平屋の大きな家です。百五十年くらい前に建てられたといわれているので、江戸時代の終わりくらいから続いている家かもしれません。

その家は、山に囲まれていて、インターネットも届かないようなところなので、ゲームが使えません。しかもテレビもテレビアンテナもなく、何とけいたい電波もとどかない場所です。だから、豊川とはちがうので、うつかりこんなことがあります。

「おじいちゃん、ニンテンドウスイッチ貸して。」

「ここは、電波がないからゲームは持ってきてないでしょ。」

「あつ、そうだった。」

とこんなやり取りを何回もくり返しています。

それだけではありません。家にある電話は黒電話なのです。けいたいには使えないので、きちょうな連らく手だんです。今の時代、黒

電話の使い方を知っている小学生は、ぼくくらいかもしれません。

山の家では、豊川の町では体験することができないことがたくさんあります。例えば、なたやノコギリを持って山に入って、木を切りたおしたり、たき火用のまきを作ったり、コップや水とうを作ったりすることです。シカやサル、ヘビやモグラにも出会うことができます。ぼくは見たことはないけど、イノシシもいるみたいです。

そんななかなか体験できない山の家を、みんなにも知ってもらいたくて、友達に家族に、

「いっしょに遊びに行かない。」

と声をかけてみました。みんな一度来たら気に入ってくれて、今では毎年の行事になっています。

ゴールデンウィークには、竹の子ほりと、バーベキューに行っています。子どもも大人も、長ぐつをはいて、くわを持って、竹の子ほりに夢中になります。ドラムかんを半分につけて特別に作った大きなバーベキューコンロで、肉や野菜を焼き、焼きそばを作ります。みんなと夜遅くまで食べたり、飲んだり、歌ったり、踊ったり、遊んだりして過ごします。

実は、山の家はポツンと一軒家なのです。周りには民家が一つもないので、夜遅くまでさわいでも、近所めいわくにはなりません。

夏休みは、流しそうめんをしに行きます。自分たちで竹を切って流しそうめん用の台やコップ、つゆの器を作ります。そうめんだけではなく、フルーツや白玉だんご、ミニトマトなど、取れそうなものは全部流して、お母さんたちが、ぼくたち子どもを楽しませてくれます。

山の家の水は、夏でもすぐく冷たいので、真夏に水遊びをするに

は最高です。春から夏の間だと、ちょっとだけ氷になっているくらい冷たい水です。夏休みには、水ですぐ破れる紙を頭に固定して、みんなが一对一で水でつぼうで破り合戦をします。水道にホースをつないで、ホースと水でつぼうで、水をかけあったりして遊びます。家の前の広場は、すごく広いので、鬼ごっこや水遊びやたき火をしたり、木と木の間につるしたハンモックで遊んだりします。山の家は自由で、自分たちで木を切って、板を用意して、家を作ったり、木に登ったり、井戸に入ったり、虫を捕まえたり、一日中外で遊んでもあきません。

夜は、みんなが布団を敷いて、寝る前には枕投げをします。子どもたちだけで寝るのは楽しいです。ぼくは一人っ子なので、たくさん友達と山の家に来てくれるのが、うれしいです。

今はだれも住んでいない山の家なので、家の掃除や井戸の掃除など管理が大変です。お盆には、東栄町の風習にそったお祭りや、お墓参りもあります。山の中を回って、山の神様へのお供えや、お参りなど覚えてやらなければいけないことが山ほどあります。毎年、ぼくと母は祖父にいろいろ教えてもらっています。そういう行事大切に、内藤家の山の家をぼくががんばって受けついでいきたいと思います。